

私と彼のお見合い事情

目次

私と彼のお見合い事情

5

番外編 私と彼のある日の日常

285

私と彼のお見合い事情

不幸な女の身の上話

ああ、どうしてこんなことになったのだろう。
神様、私がいっただいなをしたというのですか？

秋の気配が深まる、十月某日。

目の前にそびえ立つ、いかにも高級ホテルを見上げ、私、長谷川碧は不幸すぎる自分の運命を呪っていた。母親に無理やり着せられたピンク色の着物を見て、大きなため息をつく。

腹部をきつく締め上げる帯に更に憂鬱さが募り、もうため息が止まらない。

朝からここに到着する間に、何回ため息をついたかな。きつと、百回は軽く超えているだろう。大体、今年二十七歳になる女がこんな下派手なピンク色の着物つてどうなのよ。二十歳の頃なら許されたかもしれないけど、さすがにちよつと痛くない？

だけど、仕方がない。今日の私は、私ではないのだから。

「あの……どうかなさいましたか？」

その時、背後から控えめに声がかげられた。

さつきまで目立つ振袖姿でホテルの周りをうろついていた女が、いきなり正面玄関のまん前で動かなくなったことを不審に思ったのだろう。ホテルの制服を着たダンディーなおじ様が、ゆつくりと私に近付いてくる。

「先程からここで立ち止まっていらつしやいますが、どこかお加減でも悪いのでしょうか？」

「……いっそ、具合でも悪くなればいいのに。私、すこぶる健康なんですよ。なにせ、幼稚園以来一度も風邪を引いていないんです。それが、ささやかな自慢だったのに、今は健康すぎる自分が憎い」

「は、はあ……。ええと……」

いきなり愚痴り出した私に、明らかに困っている様子のダンディーなおじ様。そんな彼の顔を、すがるように見つめた。

「おじ様は、東條グループホールディングスという会社をご存じですか？」

「ええ、もちろん。日本を代表する大企業ですから。このホテルも、東條グループの系列です」

なんと、ホテルの経営にも関わっているのか。まあ、そうでなくとも、この日本で東條グループを知らない人の方が少ないであろう。

東條グループは、一般の住宅はもちろん、ホテルに病院、大型ショッピングモールや高層マンションの建設、都市開発事業といったものまで幅広く手掛けている、総合建設会社だ。

街を歩けば、『東條グループ』のシートが張られた建設中の建物をよく見かけるし、テレビからは絶えず企業CMが流れてくる。詳しくは知らないけれど、建築関連のコンペですごい賞もたくさん受賞しているらしい。

世間の知名度も高く、いわゆるスーパーゼネコンというヤツなのだが……

「……私は今から、人身御供にされるのです」

「ひ、人身御供？」

「そうです。人身御供とは……『神様への生贄』という意味もありますが、『個人の利益のために人を犠牲にする』という意味もあるのです。私の父は、東條グループ系列の会社で働いているのですが、私……父の出世と家族の将来のために、東條の御曹司様とお見合いをしなければなりません！」

うう、とうめき声を漏らしながら、振袖の袖で目元を拭う。涙なんて一滴も出ていないけど、心は泣いているのよ。

「お、お客様、落ち着いてください」

おじ様は、私の迫真の演技をすっかり信じてくれたらしい。心配そうに顔を覗き込んでくる様子に、ちよつとときめく。

「でも、天下の東條グループホールディングスのご子息様がお見合い相手なら、大喜びする女性も多いのではないですか？ 私もお顔を拝見したことがございますが、大変な美男子で……」

「美男子だからなんだって言うんですか！ 相手は百人の女性とお見合いして、その全員に断られているんですよ！ 百人ですよ、百人。おじ様の言う通り、彼はかなりのイケメンでハイスペック。多少の欠陥があっても結婚したいと思う女性が多いはずですよ。それなのに、ただの一人も上手くいっていないなんて、おかしいと思いませんか？」

「いや、しかし……」

「しかしもおかしもありません。そんなの、人間性に余程の問題があるとか思えません。現に、お見合いの場所はホテルのスイートルームですよ、スイートルーム！ 普通、レストランとかでしょ。そんなのもう、やる気満々とか思えないんですけど!? もしかしたら、おかしな性癖を持つ変態かも！」

そう力説する私に、おじ様が顔をひきつらせる。

「……まさかそんな、変態だなんて……」

「だって、密室に二人つきりですよ。しかも、相手は百人斬りの猛獣。そんなところにこの会いに行つて、いったいなにをされるのやら……もしかすると、いきなり襲われるかも……」

「ひゃ、百人斬りつて……そもそも百人に断られているわけですから、立場も意味も違うのでは？」

「密室でなにが起こっているかなんて、誰にも分からないじゃないですか！ この際、百人斬りでもいいですよ！ なのに、人身御供にされた私は……なんとしてでもその御曹司に気に入られなければいけない。どんなに行きたくなくても、帰れないんです」

「両親に、どうしてもお見合いは嫌だと言うことはできなかったのですか？」

「私の意志など関係ありません。今日……私は、別人として、お見合いに臨まなければならぬのです」

「……なにか、ご事情があるのですね」

「ええ、聞いてくれますか？ 私に降りかかった不幸を……」

悲劇のヒロインになりきって瞳を潤ませながら、おじ様を見上げる。すると彼は、忙しいだろうに神妙な面持ちでコクリと頷いてくれた。

本当に、なんていい人なんだろう……

世の中捨てたものではないと思いつつ、私はおもむろに口を開いた。

私には、茜という一卵性の双子の妹がいる。

茜は二千グラムに満たない低出生体重児として産まれた。ミルクを飲む力も弱々しく、父と母をそれはそれは心配させたそうだ。

それに比べ、私は同じ低出生体重児として産まれながら、よほど生命力が強かったらしい。新生児科の先生が驚くほどグビグビとミルクを飲んでいたそうだ。

順調に体重を増やしていく私と、なかなか体重の増えない妹。

満腹でふてふてしく眠る私の横で、自力でミルクを飲むこともできず鼻からチューブを入れられ

た妹が、両親にはとても不憫に見えたという。

それもあって両親は、私がお腹の中で茜の分の栄養を取ってしまったと思っただけだ。だが、そんなことはありえない。双子の胎児に発育の差があるのは、よくあることらしい。

けれど我が家は、自然と身体の弱い茜を中心に物事が回るようになり、物心ついた頃には分かりますく両親に差別されていた。

しょっちゅう熱を出す茜に両親はかかりつきりで、十歳年上の兄・樹と私は二の次。寂しくなかつたと言えは嘘になるが、その分、兄が私の面倒をよく見てくれた。

面倒見のいい兄が早くから文字を教えてくれたおかげで、四歳になる頃にはすでにひらがなが読めるようになっていた。私は、寂しさを紛らわせるように本や図鑑に夢中になった。

本の中には、私の知らない世界が溢れている。少しでも疑問に思ったことはすぐに兄が答えてくれたし、『それが知りたいのだったらこの本を読むといいよ』と、新たな本を与えてくれたりした。やがて、たくさんの本に知的好奇心を満たされるようになった私は、自分に関心の薄い両親のことも、両親の愛情を独り占めしている妹のことも、気にならなくなっていく。

両親や妹のことは、もう諦めている。ただ両親は、私をこの世に生み出してくれた存在だし、双子の妹というのはやっぱり特別な存在だ。茜になにかあれば、できる限り力になりたいと常々思っている。

けれど、困っていることもある。それは、蝶よ花よと甘やかされて育った茜のわがままに私が巻

き込まれることだ。

今回のことなど、その最たるものだろう。

そもその発端は、今から二週間前。父が東條グループホールディングスの御曹司である東條怜（れん）とのお見合い話を持ってきたことに始まる。

なぜ、系列会社の一社員の娘に、天上人とも言える相手とのお見合い話があったのか――

そこには当然のごとく、『複雑な理由』というものがあつた。

お見合い相手である東條怜は、非常に優秀な男らしい。

名門大学在籍中に、海外の一流大学に留学。卒業とともに東條グループホールディングスの本社に入社した彼は、伸び悩んでいた海外事業拡大のため渡米した。

そこで彼は次々と大きなプロジェクトを成功させ、北米を中心に東條グループの支社を増やしていったそう。そして今年の春、海外事業が軌道に乗ったのを機に帰国したらしい。

海外での実績が認められ常務に就任した彼は、その後も積極的に事業拡大に関わり、東條グループは右肩上がりに業績を伸ばしている。

そんな息子に対し、父である東條グループホールディングスの社長はある不安を抱いたそう。

同年代の親戚や友人の子供達が次々と結婚していく中、今年三十二歳になる息子には女の影がまるでない。いくら晩婚化が進んでいるとはいえ、大企業の御曹司がいつまでも独身でいるのは世間体が悪い。

仕事漬けで出会いもないのだろうと、社長は家柄の釣り合う良家のお嬢様とのお見合いをセッティングしたのだそう。

しかし、どういうわけか何度見合いをさせても話がまとまらない。

困り果てた社長は、仕事に励む息子に『そろそろ身を固めて社長職を継ぐ準備をしないか？』と、はつきり尋ねたのだそう。ところが彼は、社長にとんでもないことを言い放つたらしい。

曰く、『会社は継ぐが、結婚は一生するつもりがない。跡取りは養子でもとればいい』と。

予想だにしていなかった息子の言葉に、社長は大慌て。

焦った挙げ句、相手は誰でもいいとばかりに、立て続けにお見合いをさせたそう。

まずは本社、続いて系列会社の重役の娘……その時点で誰でもよくはないんじゃないかとツッコミを入れたくなるが、結果は惨敗。

途方に暮れた社長は、今度は手当たり次第に妙齢の娘さんのいる社員へ声をかけ始めた。

そうして、末端社員である父のもとにまで御曹司様とのお見合い話がやってきたというわけなのだ。

もちろん見合い相手は、私ではなく茜である。

それは、全然構わない。どれだけハイスペックであろうと、私はそんな変人御曹司になど興味はないから。

最初は渋っていた茜も、写真で見た御曹司の顔が好みにドンピシャだったらしい。とりあえず

行ってみるといって茜の返事に、両親は手を取り合って大喜び。

どんなに変わり者だろうと、相手は大企業の御曹司。この見合いが上手くいけば、これ以上ない玉の輿だ。それに、娘が次期社長夫人ともなれば、万年平社員之父が役職付になるのも夢ではない。我が家は一気にお祭り騒ぎとなってしまった。見合いに向けて盛り上がる三人を横目で見ながら、私はさっさとその日に予定を入れた。

この時点で嫌な予感はしていた。そしてこういう時の私の予感は、まず外れることがないのだ。

そうして迎えたお見合い当日。

幼なじみと出かける約束をしていた私は、玄関で靴を履いていた。

お気に入りだが、履くのに時間がかかるレースアップのショートブーツを履き終え、今、まさに家を出ようとした時……

「碧」

後ろから母親に名前を呼ばれた。その瞬間、ギクリと身体が強張る。

ああ、失敗した。こんな面倒な靴を選ばずに、もっと早く家を出ればよかった。いや、いつそ昨日から外泊しておけば……

「碧、聞こえないの？」

なかなか返事をしない私に業を煮やしたのだろう。母の苛立った声にため息をつきたくなる。こ

のまま母親の声を無視して出て行けたらどんなにいいか……

だが、我が家の最高権力者である母に逆らったら、この家で生きていけなくなってしまう。

夢を叶えるために節約中の私は、まだこの家を追い出されるわけにはいかないのだ。仕方なく振り返った私に、鬼の形相をした母が手招きした。

「まったく、一回で返事しなさいよ。ちよつと来て、茜が大変なの」

ああ、またか……

心の中でそう呟きながら、時間をかけて履いた靴を脱いでノロノロとリビングに向かう。

リビングに入ると、目を瞑った茜がソファでグツタリしていた。

「茜、具合が悪いつて言うのよ。少し寒気がするつて言うし、顔色も悪いでしょう？ 茜はすぐに熱を出すから、これから熱が上がるかもしれないわ。今日は大事なお見合いの日なのに……」

どこが顔色が悪いのよ。私には、すこぶるいいように見えますがね。

大体、『茜はすぐに熱を出す』なんて言うけれど、母は茜が最後に熱を出したのがいつか忘れているのだろうか。

確かに、茜は身体が弱かった。だがそれは、あくまで幼い頃の話……過去のことだ。

今はいたって健康体。彼女が最後に熱を出したのは、今から十四年も前の中学一年生の冬だ。

「ねえ、碧。あなた、茜の代わりにお見合いに行ってくれない？」

ほら、来た。予想通りの展開すぎて笑えてくる。

ソファアに横になつてゐる茜に視線を向けるが、後ろめたいことがあるからか、目を瞑つたまま私を見ようとしなない。

大方、御曹司様の顔に惹かれてお見合いに行くとは言つたものの、当日になつて怖気づいたのだらう。

両親から『絶対に気に入られてこい』とプレッシャーをかけられては、なおのこと。

それに、万が一失敗したらエベレスト並みに高いプライドが傷つく。だから茜は、私が駆り出されることを見越して仮病を使つてゐるのだ。

私がお見合いに行つて、上手くいけば御の字。失敗したとしても責められるのは私だけ。茜には、なんの不利益もないというわけだ。本当に、ずる賢いというかなんというか。

茜は昔からこうだ。

自慢じゃないが、私は勉強も運動も茜よりできる。だが、母に言わせれば、これも私がお腹の中で茜の栄養をとつてしまつたかららしい。

そんなおかしな言いがかりをつけられて、これまで何度、茜の苦手な試験やら、体育テスト、果ては好きな相手への告白まで、代わりにやらされてきたことか。

そんなの漫画の世界だけだと思つたろうが、意外とバレないんだな、これが。

まあ、茜が典型的な内弁慶タイプで友人が極端に少ないせいもあるけれど。

「いや、無理だよ。私、今から出かけるし」

無駄だとは思いつつも、一応抵抗してみる。だつて、今までの身代わりの中で断トツに嫌だ。お見合い百人斬りの変人となつて、絶対に関わりたくない。

「約束つて、どうせ大和くんとでしょ。いつでも遊べる大和くんと約束と、茜の将来がかかつているお見合い、どっちが大事なの！」

そんなもの、遊ぶ約束に決まつてゐる。口には出さなかつたが、考えていることが顔に出つてゐるのか、母は盛大なため息をつく。

「碧はいつもそうよね。本当に薄情な子。茜の具合が悪くても、あんたは一人でピンピンしてて。茜が可哀想だと思わないの？」

また始まつた……

小学生くらいから、茜の言う『具合が悪い』は、七割方、仮病だ。そんなの、可哀想だなんて思うわけがない。なのに、どうして私が健康なことを責められなければならないのか。

「いくら病気とはいえ、これでお見合いをドタキャンして、お父さんの出世に響いたらどうするの。あんたは、私達を路頭に迷わせる気!？」

母の言葉に、今まで空気のように気配を消していた父までもが、「そうだ、そうだ」と加勢してくる。

五十八歳になる父が、我が家の責任を娘に押し付けるつてどういうことよ。それに、入社してから今まで平社員なら、もう出世の見込みは少ないと思うのだが……

いつものこととはいえ、あまりの理不尽さに憤りを感じながらも、こうなったら逃れられないことも長年の経験でよく知っていた。

我聞せずという顔で目を瞑ったままの諸悪の根源を睨みつけ、これでもかと大きなため息をつく。「分かったよ。行けばいいんでしよう、行けば。言っとくけど、失敗しても責任持てな……」

「なんとしてでも、上手く取り入ってきなさいよ。もし、失敗したら……この家にいられないものと思いなさい」

かぶせ気味に宣言した鬼の形相の母にどん引きしつつ、つい頷いてしまったダメな私……

ちなみに、私がド派手なピンクの振袖を着せられ、母にガンガンとプレッシャーをかけられていた間も、元凶である茜は狸寝入りを続けていた。我が妹ながら、本当にいい性格をしている。

今日一緒に出かける予定だった幼なじみの草川大和にキャンセルの連絡をしたら、それだけですべてを察したらしい。彼は、『「ご愁傷さま」というメッセージとともに、台掌の絵文字を送ってきた。思わず『助けにきてー!』と送ったところ、『無理!! 骨は拾ってやる』と、即返事がくる。

なんて薄情なヤツなんだろう。私に味方はいないのか……

こうして私は、妹の身代わりとしてタクシーに乗せられ、お見合い会場であるホテルにやって来たというわけだ。

まさに人身御供の心境で、今にいたる。

「それは、大変でございましたねえ」

事情をすべて話し終えた私を、眉尻を下げたおじ様が不憫そうに見つめてきた。

いた、ここに味方!

おじ様だけだ、私にそんな言葉をかけてくれたのは。ここに来るまで、誰一人として味方のいなかった私は、このおじ様こそ私の王子様なんじゃないかって気になってくる。

「おじ様、一生のお願いです。どうか私をここから連れ去って……」

「それはできかねます。私、妻子がいる身でございますので」

精一杯、瞳をウルウルさせて必死に訴えた私のお願いは、言い終わる前に却下された。

そうですよねー。分かっていますとも、ちよつと夢を見ただけです。

現実はその甘くないよね。映画や漫画みたいに、都合よくピンチを救ってくれるヒーローなんて、現れるわけがない。

「ところで、お客様。お見合いは何時からなんですか? 随分長い時間、ホテルの周りを歩かれていたようですが……」

あら、見られていたのね。まあ、派手な振袖を着た女がホテルの周辺をうろついていたら、嫌でも目に入るか。

「……午後一時からです」

「午後一時!?」

目を剥いたおじ様が、私の顔と自分の腕時計を何度も見比べる。

それもそのはずで、現在の時刻は午後二時四十五分。約束の時間から、すでに二時間近くが経過していた。

ここまで来たものの、どうしても踏ん切りがつかないのだ。

そうしてウダウダしている間に時間だけがどんどん過ぎていき、更に行きづらくなるという悪循環に陥っていた。

ちなみに、ホテルに着いたのは約束の時間ギリギリ。つまり私は、二時間弱もホテル周辺をウロウロしていたのだ。

「それは、大丈夫なのですか？」

「大丈夫……じゃないでしょうねえ。さつきからバッグの中の携帯が鳴りっぱなしです」

「で、出た方がよろしいのでは？」

「そんな恐ろしいことできません。母になんて罵られるか……。私、どうすればいいのでしょうか。行くも地獄、行かぬも地獄です」

このまま帰れば、母の逆鱗に触れるのは必至。同時に、二時間近く待たせているお見合い相手から、気に入られるなんてこともありえないだろう。

「まあまあ、そう悲観せずに。もしかしたら、これが運命の出会いになるかもしれませんよ。人との出会いは、一期一会なのですから」

悲愴感を漂わせる私を不憫に思ったのか、おじ様はそつと背中に手を当てて優しい笑みを向けてくれる。

「ありがとうございます。私、お見合いは死ぬほど嫌ですけど、おじ様に会えてよかったです」

「私も、素敵なお嬢様に出会えたことを光栄に思います。では、東條様のお部屋にご案内いたしますよう」

「ええ!? そんな急に! お、おじ様、私……まだ心の準備が……」

笑顔のままホテルの入口へ促され、慌てて首を横に振る。

「では、お部屋に向かいながら心の準備を終わませよう。先方を二時間近くもお待たせしているのですしょう? 差し出がましいようですが、約束をした以上、それについてはきちんと謝罪されるべきですよ」

う、正論すぎて反論できない……

黙りこくった私にニッコリと微笑んで、おじ様はさりげなく、だが有無を言わず私をエスコートしていく。観念してホテルの中を歩いていると、広いロビーに豪華なシャンデリアが目を引く。

こんな高級ホテルに一度は泊まってみたいと思うが、今日みたいな目的では来たくなかった。

エレベーターのボタンを押したおじ様が、緊張で表情を強張らせている私を振り返る。

「東條様は、ここ二十階にお泊まりです。きつと、お客様が到着されるのを待っていると幸いですよ」

「そ、そんなことは……。あの、やっぱり私……」

つい逃げ腰になる私の背中に、おじ様がそっと手を添えた。そのまま扉の開いたエレベーターの中に促される。渋々中に入ると、無情にもエレベーターの扉が閉まりみるみる上昇を始めた。

あつという間に目的地に到着してしまい、私はためらいながらフロアに足を踏み出す。できることなら今すぐ引き返したいが、後ろに立つおじ様がそれを許してはくれない。

「このフロアの一番禺の部屋が、東條様のいらっしゃるスイートルームです。さあ、覚悟は決まりましたか？」

「む、無理です。やっぱり私……帰ります」

往生際が悪いと言われても、やっぱり得体の知れない男とのお見合いなんて嫌だ。どの道、大遅刻でこちらの第一印象は最悪。このまま逃げ帰っても結果は同じじゃないか、いや同じに違いない。

そう都合よく決めつけて、回れ右しようとする私をおじ様が引き止める。

「ダメです。先程も言いましたが、遅刻に対する謝罪はされるべきですよ。まして、お相手は大変お忙しい方なので。それに、お客様が心配されていた、いきなり襲われる……ということは、ないはずですから」

穏やかに断言されて、私はおじ様を見つめて尋ねてしまう。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

「実はここだけの話、東條グループホールディングスのご子息は……女嫌いなのです」

声をひそめて囁かれた内容に、思わず目を見開く。

「え、女嫌い？」

「ええ。確かな筋からの情報なので間違いありません。お父上は彼の花嫁探しに躍起になって気づいていないようですが、お見合いが上手くないのは恐らくそのせいかと。決して猛獣でも変態でもありませんので、ご安心ください」

なるほど、なるほど。御曹司様は女に興味がないのか。

「つて、それじゃ、気に入られようがないじゃないですか！」

ついツツコミが口から漏れてしまった。大体、これだけ遅刻している時点で気に入られるわけもないし、謝罪しても無駄ではないか。ならばいっそ、お見合いなどせずにこのまま帰ってしまいたい。

「そんなことはありません。きつと、お客様はあの方に気に入られますよ。さあ、着きました」

「え、もう!? ちょっとまだ心の準備が……」

私の必死の訴えを華麗にスルーして、おじ様が笑顔で部屋のインターホンを鳴らす。

「お客様。またお会いできることを楽しみにお待ちしております。それでは私は、ここで失礼させていただきますね」

優雅にお辞儀をしたおじ様が、くると私に背を向けた。

「あ、待って！」

無情にも遠ざかっていく背中に手を伸ばすが、むなしく空を切るだけ。

おじ様の薄情者……と、心の中で悪態をつきながらも、私は「逃げ」の体勢をとりつつ目の前の豪華な扉を見つめる。

——この時、私は大きな勘違いをしていた。

おじ様は『女嫌い』と言ったけれど、それは決して『女に興味がない』ということではない。そのことを、私はすぐに思い知ることになるのだった。

御曹司様と初対面

どのくらい時間、目の前の扉を眺めていただろう。

恐らく、一分にも満たない時間だろうが、私にはもっと長く感じられた。

まるで判決を待つ被告人のような気持ちになってくる。罰金で許されるなら、喜んで払うな私。そんなことを考えていると、目の前の豪華な扉がガチャリと音を立てて開いた。

「ひっ！」

思わず悲鳴を上げた私の顔を、扉から顔を出した長身の男が見下ろしてくる。

私には関係がないからと釣書も見なかったが、茜が食いついたのも頷けるほどのイケメンだ。

綺麗な眉に、すっと通った鼻筋。ややたれ目がちの瞳は、大きいというわけではないのにキラキラと輝いている。形のいい薄めの唇は、血色がよくてやけに色っぽい。

芸能人でもないのに、これほど容姿の整った人がいるんだなあ。この顔で金持ちな上に、頭もキレるとか……神様は不公平だ。

しかし、なんだろうな……この雰囲気。一見、好青年に見えるのに、お近づきになりたくない。無意識のうちにジリジリと後退してしまった私に、彼は一瞬目を見張った後、すぐに取り繕うような笑みを浮かべた。

「お待ちしていました。長谷川茜さん」

完璧すぎる微笑みが、どこか胡散くさい。それどころか、優しげに細められた瞳の奥に、冷たい光を宿している気がする。

私の勘が告げる——この男に関わってはいけないと。

早く逃げろと頭の中で鳴り響く警鐘に従って踵を返そうとした私の腕を、御曹司様に掴まれた。「どちらに行かれるんですか？ あなたが来るのを首を長くして待っていたんですよ」

「え、いや、あの……」

一段低くなった声が、身体の奥に響く。イケメンは声まで美しいと感心しながらも、背中に冷や汗が流れる。そんな私の腕を掴んだまま、御曹司様は左手首の高級そうな腕時計を見た。

「一時間五十八分の遅刻ですか。こんなに待たされたのは生まれて初めてですね。さあ、中へどうぞ。あなたがどんな言い訳をしてくれるのか、楽しみです」

紳士的な口調とは裏腹に、強い力で扉の中に引きずり込まれる。背後でガチャンというオートロックの音が聞こえてきて、絶望的な気持ちになった。

そのまま高そうな応接セットのソファに座らされる。まるで退路を塞ぐように隣に座った御曹司様に、私は小さく縮こまった。

「改めまして、東條怜と申します。本日は、お忙しい中わざわざ足を運んでいただき、ありがとうございます」

「は、長谷川あお……茜です。こちらこそ、お待たせして、本当に申し訳なく……」

「では茜さん、早速、遅刻の言い訳をお聞かせいただきたいのですが？」

膝に肘をついた彼が、じつと顔を覗き込んできた。そのどこか面白がっているような表情に、頬がひきつる。

さて、どうしようか……

電車が遅延、はバレルな。大体、こんな派手な振袖を着て電車に乗る勇氣はない。

でも、タクシーが渋滞に巻き込まれて、というのはいかにもという感じでわざとらしいし……、この御曹司様に下手な言い訳が通じるとも思えないんだよな。

上手い言い訳が思い浮かばず答えに窮していると、彼が口を開いた。

「お答えになれませんか。それなら……」

そう言つて、胡散くさい笑みを浮かべた彼の手が、私に向かって伸びてくる。

「タクシーが渋滞に巻き込まれました！」

不穏な空気を感じとり、気づけば頭の中で却下したテンプレすぎる答えを口にしていた。

「なるほど、渋滞……ですか。実は、この部屋からは、ホテルの玄関の様子がよく見えるんですよ」

ぎくりとして、恐る恐る顔を上げた私に、御曹司様がとても楽しそうに笑った。それはさっきまでの胡散くさいものとは違い、彼の本当の笑顔に見えた。

イケメンの素敵な笑顔に、状況も忘れて見とれてしまう。

「約束の時間を十五分ほど過ぎた頃でしょうか。たまたま窓の外を見たら、ピンク色のとても目立つ振袖を着た女性がホテルの周りをウロウロしているのが見えました」

彼に見とれていた私は、その言葉にハッと我に返った。

顔色が変わっただろう私に御曹司様の笑みが深まる。

な、なんてやつだ！

見ていたくせに、わざわざこんな聞き方をしてくるなんて。この男、絶対に性格が悪い。

彼は勝ち誇った様子で再び口を開いた。

「では、もう一度お聞きします。本日、約束の時間に遅れた理由はなんですか？」

その口ぶりから、私が嫌々ここに来たことも分かっているに言っているに違いない。

言葉の出ない私を、御曹司様は口元に笑みを浮かべたまま見つめている。

その余裕ぶった顔に無性に腹が立つて、整った顔をキツと睨みつけた。

「来たくなかったからです！ 分かかって聞くなんて性格悪いんじゃないですか？」

どうせバレているならと、半ばやけくそで叫んだ私に、彼は満足そうに頷いた。

「ええ、少し意地悪をしました。あなたの動向が気になって、かなりの時間を無駄にしまいましたから。いっそ、迎えに行こうかと思いましたが、こんなことは、初めてです」

そこで、目の前のテーブルの上にパソコンとなにかの資料が広がっていることに気がついた。つまり、ここで仕事をしていたら熊のようにホテルの周りをウロウロしている私に気づいて、そのマヌケな姿をずっと眺めていたってこと？

「いつもなら、来ないなら来ないで好都合と放置するところでしたが。どうにも気になって、ご実家にも連絡してしまいました。大丈夫でしたか？」

「現在進行形で携帯が鳴りっぱなしです」

「ええ、さつきからバイブ音が響いていますね。出なくていいのですか？」

私は彼から視線を逸らした。

「お、恐ろしくて……」

その一言ですべてを察したのか、御曹司様は小さく頷きスーツのポケットから自分の携帯を取り

出してどこかに電話をし始めた。

「……僕です。ええ、無事にいらっしやいましたので、彼女の家に連絡を入れてもらえますか。思った通り、なかなか興味深い方です」

チラリと私を見た彼の視線に、ゾクリと背筋が震える。

今、興味深いとか言った？ え、私、興味を持たれている？ なんで？

「そんなことしませんよ。僕は、紳士ですから。……ふふ、褒め言葉ですね。では、切りますよ。経過は後ほど」

私から目を離さず通話を終えた彼が、携帯をテーブルに置いてこちらに向き直る。

「さて、と。茜さんは、先程ここに来なくなかったとおっしゃいましたが、僕とお見合いをしたくなかったということですか？」

「はあ、まあ……そうですね」

今更、取り繕いようがなく正直に答えると、御曹司様はなぜかキラキラと目を輝かせた。

「それはなぜですか？ 自分で言うのもなんですが、相当な優良物件だと思いますよ。顔だって悪くないし、僕と結婚すれば一生遊んで暮らせませす」

「……確かに、そうですね。でも、私はそんな生活に魅力を感じません。夢もあるので。家庭に縛られるのはごめんです」

「夢、ですか。なら、なおのこと僕の財産を利用したいとは思わないのですか？」

「思いません。夢は自分の力で叶えるものでしょう？ そのために、好きでもない人と結婚なんてしたくないです」

「その意見には、同感ですね。僕も愛のない結婚をする気はありません。元より結婚する気もなかったのですが……」

そこで言葉を切った御曹司様が、じつと私の顔を覗き込んできた。居心地の悪さに離れようとするけれど、それ以上に距離を縮められる。

さつきから顔が近いんですけど、なんなの？ というか、すごく嫌な予感がする。

「今、僕は茜さんにとっても興味がある。あなたのことがもっと知りたい。あなたはどうです？ 僕に興味はない？」

こ、これは……もしかしなくとも口説かれている？

ええ？ 二時間近く遅刻してきた女に、なぜ!?

「なぜ、という顔をしていますね。僕、あなたみたいなのがタイプなんです。顔も好みですし、あまり化粧つ気のないところがいい。芯の通った考え方も好ましい。なにより……」

私の顔をじつと見つめていた御曹司様が、私の首筋に顔を近づける。驚いて身を引こうとしたら、ソファアの肘掛けに背中がぶつかった。どうやら先程の攻防戦で、逃げ場がなくなっていたらしい。

「香水臭くない。なのに、甘い花のような……とてもいい香りがします。茜さんは、うちの系列の会社の受付をされているんですね」

「え、ええ……」

まずいな、仕事内容とか突っ込んで聞かれたら答えられないんですけど……というか、近い。間近にある整った顔に、自然と心臓の鼓動が速くなる。

「あなたはお見合いに来たくなかったかもしれませんが、なんとしてでも気に入られて来いとお両親に言われているのではないですか？」

耳元で囁かれた言葉に、息を呑んだ。

「……どうしてそれを」

「分かりますよ。僕に近づいてくる人間に、下心がない方なんていませんから。この半年の間に何人の女性とお見合いをしてきたか知っていますか？」

「……百人？」

「もつといるでしょうね。いちいち数えてはいませんが、毎週、毎週……したくもない見合いに時間をとられて、うんざりしているんです。あなたのように、ご両親に言われて嫌々来た女性もいました。少し甘い顔をすれば、皆、僕に媚びへつらい、しなだれかかってくる。まったく、鬱陶しいことこの上なく」

その言葉に、少し違和感を抱いた。お見合いをした女性サイドから断られてきたと聞いたけれど……彼の言い方だと、むしろ彼が断りたがっているように聞こえる。

綺麗な顔を歪めた彼の指が、私の頬を撫でた。こちらを見つめる漆黒の瞳に妖しい光が灯り、よ

く分らない身の危険を感じて身体が強張った。なんか、まずい気がする。

「あなたは、僕に媚を売らなくていいんですか？ 僕に気に入られないと、困るのでは？」

確かに、困る。困るが、彼の挑発に乗ってはいけないと私の本能が告げている。

なんとかこの状況から逃げ出さなければと頭をフル回転させるが、なかなかいい案が思いつかない。

「手っ取り早く、僕に気に入られる方法を教えてあげましょうか？」

目の前で、彼のまどう空気が一変したのを感じた。変わらなず笑みを浮かべているが、私を見下ろす瞳は恐ろしいほど冷たい。ゾクリと肌が粟立ち、頭の中に警鐘が鳴り響く。

逃げなければいけない——そう思うのに、魅入られたように彼から視線が逸らせない。

「この場で僕に抱かれればいい。そうすれば、あなたと結婚して差し上げますよ」
怖いくらい綺麗な顔を寄せて、彼がゆっくりと囁いた。

言葉の意味が理解できなくて啞然としてっていると、突然、身体が宙に浮いた。

「わっ？ なに!？」

さつきまで座っていたソファが、みるみる遠ざかっていく。

状況が分からず混乱する私の右足から、草履が脱げて床に落ちた。

それに構うことなく彼はどんだん部屋の奥へ進み、私を抱いたまま器用に部屋のドアを開ける。

その先にあつたのは、とても大きなベッド。

嫌な予感に、心臓がどくどくと音を立てる。さつき、彼はなんと言った？ 『気に入られたいなら、この場で抱かれる』みたいなことを言っていなかったか？

まずい、と思った時には私の身体がベッドに投げ出されていた。焦って起き上がろうとする私の上に、彼がのしかかってくる。

「綺麗な肌ですね。触り心地もいいし、これはなかなか楽しめそうだ」

まるで時代劇の悪代官のようなセリフを口にした御曹司様が、はだけた着物の裾から手を差し込み、太股に触れてきた。

「か、勝手に触らないで！ あなた、女性が嫌いなんじゃないの？」

肌を褒められたのは嬉しいが、こんな男のために毎日ケアをしているわけじゃない。私を見下ろす顔をキッと睨みつけると、再び彼の雰囲気が変わった。

黒い、なんか黒いよ！ なにがって、オーラが。聖人君子みたいな顔をして、裏で悪いことしているタイプなんじゃないの、この男。

「そんなこと、誰に聞いたのです？ ……ああ、そういうことですか。あの人も相当焦っていますね」

どこことなく不穏な気配をまとった彼の手が、私の頬に触れる。内心の怯えを隠して相手の顔を睨み続けていると、御曹司様の目がずっと細まった。

「いいですね、その目。最初に見た時から、すごく印象的でした。意志の強そうな、とても綺麗な

目だ。あなたはなにか勘違いしているようですが、僕の恋愛対象は女性ですよ。ただ、受け付けな
い女性が多いというだけです」

話が違うじゃない、おじ様！ 襲われるようなことはないんじゃないの？ 現在進行形で襲
われているんですけどー！

表情を強張らせる私を見つめて、彼はクスリと笑った。そのまま耳元に唇を寄せてくる。熱い息
が耳にかかり、身体がビクリと震えた。

「……やつぱり、とてもいい香りがする。なんなのですか、あなたは。あの人——父に僕を誘惑す
るよう頼まれました？」

「は？ 父？ 誘惑？」

この男は、なにを意味の分からないことを言っているのだろう。

そんなことより、今はこの状況から抜け出す方が先だ。私は、彼の下から抜け出そうと必死にも
がくが、細身に見える身体はびくともしない。

すると、首の辺りに顔を埋めていた彼が顔を上げ、私のことを見下ろしてきた。笑みを消した瞳
の冷たさに、ゾツとする。

「遅刻も、僕に興味がない振りをするのも作戦ですか？ あの人に、そうすれば僕の気を引けると
でも吹き込まれました？」

「なにを言ってる……」

「まだとぼけるつもりですか？ まあ、いいです。それなら、続きをしましょうか。僕に気に入ら
れたいんでしょう？ どうぞ、僕を誘惑してみてください」

その、完全に人を見下している視線に頭が血がのぼった。確かに、なんとしても上手く取り入っ
ていとは言われたけれど、そんなこともう知るか。

いくらイケメンでも、こんな男となんて絶対にごめんだ！

着物を脱がそうとしてくる男の手から逃れようともがくが、ベッドのスプリングが利きすぎて思
うように動けない。必死の抵抗が続いているうちに、頭になにか硬いものが当たった。反射的にそ
ちらを見た私は、目に飛び込んだきた衝撃的な光景に危うく悲鳴を上げそうになる。

な、なに!? このピンク色のいかがわしい形をしたものは!?

よく見たら、ムチとか口ウソクまである!?

なんと、ベッドの上には、見るからにいかがわしいものが散乱していた。

驚愕しながら男の顔を見上げると、彼はニヤリと笑って、その中から男性器を模した——いわゆ
る“大人のおもちゃ”を手にとった。

「実は僕、これで女性がよがり狂うのを見るのが趣味なんです。あと、痛みに歪む顔も大好きでし
てね。ああ、大丈夫です。それさえも快感に変わるように調教して差し上げますよ」

彼は笑顔のまま、手に持ったそのスイッチをカチリと入れた。

私の顔からサッと血の気が引く。

人の性癖をどうこう言うつもりはないが、自分が当事者となれば話は別だ。ヴーヴーと音を立てるおもちゃを持ったまま、こちらへにじり寄ってくる御曹司様。

余裕ぶっている綺麗な顔を睨みつけ、私はタイミングを計る。そして――男の急所めがけて右足を勢いよく上げた。

私の渾身の蹴りを、咄嗟におもちゃを投げた御曹司様が腕で受け止める。

「……っ！ これは、驚いた。特技はピアノではなかったのですか？」

それは、茜の特技。私の特技は空手だ。小学校から高校まで続けていて、黒帯を持っている。

だけど、彼と同じくらい私も驚いていた。

完璧に相手の隙を狙った私の蹴りを、御曹司様はなんなく受け止めたのだ。いくらブランクがあつて着物だからとはいえ、まさか止められるとは思わなかった。

だけど、本来の目的は叶った。私の反撃がよほど予想外だったのか、彼は目を見開いたまま固まっている。私はその身体を思いつき突き飛ばし、急いでベッドから下りた。

「誰にも誘惑しろなんて頼まれてないわ！ いくらイケメンでも、あなたに触れられるのなんかお断りよ。この、変態腹黒野郎！」

ベッドの上で呆気にとられたように私を見つめる御曹司様にそう言い放ち、猛ダッシュで部屋の出口へ走った。

「……くっ、くっ、変態腹黒野郎って。そんなことを面と向かって言われたのは初めてです」

ドアノブに手をかけたところで背後から楽しそうな声が聞こえて、反射的に振り返る。いつの間にもベッドを下りたのか、彼は寢室の扉にもたれかかり、悠然と私を見つめていた。

「長谷川茜さん、あなたのことが気に入りました。望むものはなんでも差し上げますので、僕のものになってください」

思いがけない彼の言葉に唖然としながらも、もげるほどの勢いで首を横に振る。こんな変態男に好かれても、全然まったく嬉しくないわ。

「結構です。自分の望むものくらい、自力で手に入れてみせますから。それに、あなたみたいな変態、絶対にお断りだわ」

我ながら結構なことを言っていると思うのに、なぜか彼は嬉しそうに微笑んだ。

「いいですね。あなたのそういうところが実に好ましい。今回のお見合い、進めてもらうよう父に話しておきます」

「……そうですか。父と母が喜ぶと思います」

そうだ、私はあくまで代役。茜がこの男の性癖についていけるのかは分からないが、そこは二人の間で解決すべき問題だろう。とにかく、当初の目的は果たした。これ以上この男と同じ空間にたくない。私はさっさと部屋のドアを開ける。

「その態度が分からないのですが、僕がお見合いを進めると言えば、あなたに逃げ道はないはず。なのに、まるで他人事のように答えるのはなぜです？」

部屋の外に足を踏み出した状態で振り返ると、御曹司様は怪訝そうに眉間にシワを寄せていた。「一生、分からないままでいてください」

とびっきりの作り笑顔でそう言っただけ、私は脱兎のごとく走り出す。要するに言い逃げ、というやつだ。

全速力で長い廊下を駆け抜けて、幸運にも二十階で停まっていたエレベーターに飛び乗った。そして、即座に『閉』ボタンを連打する。動き出したエレベーターの中でホッと息をつくが、このホテルから離れるまでは油断できない。

軽快な音を立てて一階に着いたエレベーターを飛び出し、ロビーを駆け抜ける。周囲の注目を集めている気がしないでもないが、今はそんなの気にしてられない。

やっとの思いでホテルの外に出ると、停まっていたタクシーに飛び乗った。

「すみません、すぐに出してもらえますか」

「ちよ、ちよっとお客さん。大丈夫かい!」

目を真ん丸にして驚いている運転手さんに首を傾げるが、バックミラーに映った自分の姿を見てぎよっとした。

先程の攻防戦のせいで、髪はぐちゃぐちゃだし、着物もかなり着崩れている。

我ながら、なんとも事件性を感じる格好だ。

案の定、「警察に行くかい?」と心配そうに聞いてきた親切な運転手さんに慌てて首を横に振る。

「違うんです! じ、実は、今日このホテルで結納をする予定だったんですけど、直前で彼の浮気が発覚してちよっと修羅場を……。あ、そうだ! 早く出してください! 捕まったら、浮気男と結婚させられちゃいます!」

我ながら苦しい言い訳だけど、ホテルで着物を着ている理由がお見合い以外に結納しか思いつかなかった。通用するか心配したが、その心配は杞憂に終わった。

「災難だったねえ。でも、結婚する前に分かってよかったじゃない。浮気なんてする男は口くなくもんじゃないよ!」

人のいい運転手さんは、私の下手な言い訳をすっかり信じてくれたらしい。バックミラー越しに同情の目を向けつつ、急いで車を出してくれた。

ひとまず行き先を告げて、ホッと肩の力を抜く。そして、ずっと放置していた携帯を鞆から取り出すと、そこにはおびただしい数の着信履歴が残っていた。画面いっぱい『母』という文字が並んでいるのを見て、私はブルリと身震いする。

なんだか気に入られたっぽかったけど、後先考えずにケンカを売ってしまった自覚もある。これは、本格的に家を追い出されるかもしれない。

ダメだ。恐ろしすぎて、とてもじゃないが家には帰れない。それに……私は、乱れきった自分の姿を見下ろした。この格好で帰ったら、母になにを言われるか分かったものじゃない。

私はタクシーの運転手さんに行き先を変更してもらい、今日会はずだった幼なじみの住むマン

シヨンへ向かった。

約束がなくなつたとはいえ、大和のことだ。出かけずに部屋でゲームでもやっているだろう。運転手さんにお礼を言つてタクシーを降り、エレベーターでヤツの部屋のある十階に上がる。

幼なじみの草川大和は母親同士が同級生で、家も近所。幼い頃に大和の両親が離婚して、うちに預けられることも多かつたため、本当の兄妹のように育つた。そして、今は実家の近くで一人暮らしをしている。

私とは幼稚園から大学まで一緒だった上、今は同じ会社で働いているという見事な腐れ縁。大和は私にとって、親友であると同時に、家族のような存在だった。

実は意外と整つた顔をしているのだが、まったくと言っていいほど外見に構わないため、それに気づかれない残念な男だったりする。

部屋のインターホンを押すと、大和がドアを開けて顔を出した。今日も見事に頭がボサボサだ。頭のとっぺんから足の先まで私の姿を眺めた大和は、眼鏡のブリッジを押し上げながら切れ長の瞳を見開いた。

「お前っ……、なんだその格好！ 乱闘でもしてきたのか？」

「……まあ、そんなとこ。悪いけど、シャワーと服貸してくれない？ あ、草履片方忘れてきた」
そういうえば、あの男に抱えられた時、片方脱げたんだけ。逃げるのに必死で忘れてた。

「おい、本当にになんしてきたわけ？ 茜の代打で、東條グループホールディングスのお坊ちゃん」と

お見合いしてきたんじゃないのかよ」

「してきたよ。ホント、とんでもない目に遭つたわ」

ため息をつきながら大和のマンションに入ると、鞆の中に入っていた携帯が着信を告げた。きっと相手は母だ。

正直、出たくない。だけど、命じられたことはやってきた。それに、直接小言を聞くよりは、まだ電話の方がマシだろう。面倒くさくなつたら電波が、とか言つて切つちやえばいいや。

「はい、もしも……」

『碧！ あんた、でかしたわ！』

携帯を耳に当てた途端、聞こえてきた母の興奮したキンキン声に、思わず携帯を耳から離す。

な、なに……？ なんか、褒め言葉のようなものが聞こえた気がするんだけど。テストで百点をとつても、マラソンで一位になつても、決して私を褒めることなんてなかつた母が？

「え、あ、あの……」

動揺のあまり上手く言葉が出てこない私に、母が電話口で捲し立てる。

『急なことだったのに、よくやってくれたわね。さつき東條さんから、この話を進めてほしいって連絡があつたのよ。ああ、これで茜の将来は安泰だわ。本当にありがとうね、碧』

「あ、う、うん……」

いつになく上機嫌な母にゾクツと背筋を震わせながら、電話を切る。褒められた上に、お礼まで

言われるなんて……怖いんですけど。鳥肌たったし。空から槍でも降るんじゃないかな。

「電話、おばさん？ マジでなにがあったわけ？」

訝しげな顔で私を見つめる大和に、今日の出来事を話す。彼は何度も驚愕の声を上げ、最後には呆れた様子でため息をつき、私にパーカーとジャージを差し出した。

「お前、めちやくちゃ面倒くさいことになってるじゃん。大体、碧は茜に甘すぎるんだよ。前から言ってるけど、それ、茜のためにならないぞ」

「分かってるよ。けど、茜に甘いのは私よりお母さんだから。まあ、気に入られてこいつという指令はクリアしたし。これで、この件に関してはお役御免でしょ」

「お前、それ本気で言ってるわけ？ 話を聞く限り、その見合い相手は相当なクセ者だ。どうせお前、茜のフリなんてしてないだろうし、御曹司様が気に入ったのはあくまで碧ってことだろ。今後、絶対に厄介なことになると思うけどな」

「そうだよ。茜があのお男と結婚したら義理の姉弟だよ。私、そんな可能性、すっかり忘れて喧嘩売ってきちゃった」

そう言ったら、大和が大きなため息をついた。

「……我が幼なじみながら、バカすぎて話にならない」

額に手を当てて、項垂れる大和にムツと唇を尖らせる。

バカって、ひどい。学校の成績では、大和に負けたことがないというのに、失礼な。

「その御曹司様が、茜に会ったら絶対別人だって気づくぞ。お前ら、顔はそっくりでも雰囲気も身も正反対だからな。よっぽどのマヌケじゃない限り、騙されたりしないと思うぞ。そうだったらどうなるかなー。お前も、夕夕じゃ済まないだろうな」

「……怖いこと言うのやめてよ」

「俺は事実を言っているだけだ。まあ、別にお前が変な男に捕まろうと、知ったこっちゃないし。だけど、いいか？ 俺のことは、絶対に巻き込まなよ」

人差し指を突きつけて、釘を刺してくる大和に再びムツとする。

私だって巻き込まれたんですけどー。

でも、大和の言うことにも一理ある。経歴を見ただけでも優秀だと分かるあの男が、身代わりに気づかないとは思えない。

どうしよう。なんだか、すごく嫌な予感がある――

これからのことに、一抹の不安を覚えつつ、私は着替えを持ってお風呂場に向かう。

勢いよくシャワーを浴びながら、今日の出来事も、汗と一緒に流れてしまえばいいのに、と本気で思った。

だが、そう都合のいいことなど、現実起こるはずもない。

自他ともに認める超現実主義者の私は、世の中がそんなに甘くないことをよく知っている。

今更遅いと思いつつ、たとえ家を追い出されても、今回ばかりは断固拒否するべきだったと自分

の行いわざを深く後悔するのだった。

※ ※ ※

ボタンとホテルの扉が閉まるのを見届けてから、俺——東條怜はゆっくりとベッドルームに戻った。

ベッドの上で不愉快な音を上げ続けるもののスイッチを切り、床に置いてあった箱に放り投げる。乱れたベッドに彼女の残り香を感じて、思わず口元が緩ゆるんだ。

着物の裾から覗のぞいた彼女の白い肌を思い出し、身体の芯が熱を持つ。こんな気持ちになるのは、何年振りだろうか。

「さて、と」

まずは、やるべきことをやっつけてしまおうとベッドルームを出て、テーブルに置いてあった携帯を手取る。電話をかける相手は、我が優秀な右腕——もとい秘書だ。

『もしもし？ 終わったのか？』

親友でもあるこの秘書は、俺に対してとてもフランクだ。ちなみに俺の方は、丁寧に話す時とフランクに話す時の両方がある。使い分けしているというより気分が変わることが多い。

「ええ、逃げられてしまいました……。それで、調べてほしいことがあるんです。彼女の詳細な

経歴と……年の近い姉妹がいれば、その方の経歴もお願いします。少し、気になることがありますし」

『了解。今回の見合い相手、そんなに気に入ったのか？』

「そうですね……。また会いたいと、思うくらいには」

『……その相手、例の変態設定を受け入れたのか？』

「いいえ、ドン引きしていましたね。危うく再起不能にされるところでした」

彼女の見事な蹴りを思い出し、クスリと小さな笑みが零こぼれる。初めて、格闘技をしていたことに感謝した。でないと本当に男としての機能を失っていたくらい、見事な蹴りだった。

『なにがあったか、後で教えるよ。じゃあ、とりあえず調べておく』

「ええ、よろしくお願いします」

電話を切った後、俺は資料に紛まぎれていた今日の見合い相手の釣書を手に取る。

東條家の跡取りとして、跡継ぎを残すことは義務だと理解していた。

だが、自分の容姿や肩書に惹かれて寄ってくる、化粧や香水の匂いをプンプンさせた女達には嫌悪しか感じられない。いつそ結婚などせず、養子をとって教育した方がよほど建設的だと申し出たのだが、父は納得してくれなかった。

自身が恋愛の末に結婚したせいとか、やたらとロマンチストな父に『必ず運命の相手はいる』とお見合いさせられ続け、早半年——

「もしかしたら、見つけたかもしれない……」
 釣書に添えられた、薄いピンク色のワンピースを着た女性の写真を眺める。
 容姿はそっくりだが、そこに写っている女性と先程までここにいた女性が同一人物とは思えなかった。

意志の強さを感じさせる印象的な瞳。それを思い出すだけで、なぜか胸の奥が疼く。
 その時、足元に転がる彼女の草履を見つけて、自然と笑みが零れた。

「忘れ物……まるでシンデレラだな。……さて、これからどうするか」
 草履を拾いながら、この見合いを進めてもらうよう父に連絡すべく、再び携帯を手にとった。

不本意な初デート

ああ、見事な秋晴れだ。徹夜明けの目に、太陽の光が沁みる……

あのお見合いから、二週間後の今日。

私は着たくもない花柄のワンピースを着せられて、ニコニコと爽やかな笑みを浮かべる御曹司様と再び対峙していた。

ほんの数時間前まで、めちやくちやいい気分だったのに。

なんだって、こんなことに……

時は今から数時間前に遡る。

私は勤務先である『ナチュラアース』の研究室で、眠たい目を擦りながら香水の試作品をムエツト——細い短冊切りの厚紙につけていた。

今取り組んでいるのは、新しい香水の試作。テーマに即した香りを完成させるべく、調香を繰り返しているところだ。

私の勤めるナチュラアースという会社は、自然派化粧品——いわゆるオーガニックコスメの開発販売を行っている。

幼なじみである大和のお母さんが代表取締役を務めていて、従業員数は二百人ほど。私は理系の大学院修士課程を修了し、この会社に就職した。商品研究開発部に配属されて三年目になる。

商品の企画から開発、研究までを一手に行っている部署のため、なかなか忙しい。

その分、様々な知識を身につけることができるという利点もある。会社に泊まり込むこともザラだが、好きで就いた仕事なので苦ではない。

なにより、ここでの仕事は、私の夢に繋がっていた。

私は将来、自分の作ったハーブ園の植物でオリジナルコスメを作り販売するのが夢なのだ。だから、この会社でありつただけの技術と知識を身につけるのを目標としている。

そうして現在、『初めてのオーガニックコスメ』をテーマにした十代向けの商品の開発を担当していた。

私はムエットを揺らし、つけたばかりの香水の香りを確かめる。今回の香水のテーマは、『ファースト・パフューム』。その名の通り、少女が初めてまとう香りをイメージしていた。

「あー、眠くて頭回らないわね。あ、でもこれいいかも」

研究室の机に一番から十番のラベルのついた瓶が並べられ、それを開発に関わるメンバー十二名で取り囲む。順番に香りを嗅いでいた三歳年上のかなえさんが、目を瞑ってムエットを揺らしながらそう口にした。

「何番？」

最年長でリーダーを務める三上さんが尋ねる。かなえさんは、もう一度香りを大きく吸い込んでから答えた。

「五番」

その言葉に反応して、思わずひよこっと顔を上げる。五番は、私が調香したものだ。

「五番は誰の案？ お、長谷川さんか。うん、いいよ、これ。トップの爽やかな香りから、ラストのほんのりスパイシーで甘い香りに変化していくのが、少女が大人の階段のぼっていくっていう初々しい官能を感じるわ」

「先輩、詩人ですねえ。でも、確かにいいな、これ」

ムエットを揺らしている大和の横で、私も香りを吸い込む。香水は、トップ、ミドル、ラストと時間の経過によって香りが変化していく。五番にはトップにシトラス系、ミドルに甘めのフローラル系、ラストにはオリエンタル系の香りがくるようにブレンドした。

うん、我ながらこれはいいできだ。細かい濃度の調整は必要だろうけれど、大体思い通りの香りになっている。

「じゃあ、二番と五番を候補として社長に出すか。でも、俺は断然、五番推しだな」

「私も。多分、これが通ると思うよ」

「本当ですか？ やった！」

ムエットを交互に嗅ぎながらそう言った三上さんに、かなえさんも笑顔で頷く。ベテランの上さんと香りものに強いかなえさんに太鼓判を押してもらい、心の中でガッツポーズをする。もし、これで社長からOKが出れば、初めて自分の開発した商品が世に出ることになる。

「よし。ようやく目処もついたし、今日は帰ろうぜ。みんな、三日は家に帰ってないだろ？」

三上さんが、そう声をかけると、すぐにみんなが同調する。

「俺は、家より布団が恋しいですね。横になって身体伸ばしたい」

ぐっと背伸びをしながら大和が欠伸をする。休憩室にあるソファで仮眠をとっていたが、背の高い大和には窮屈だったのだろう。

私は、湯船が恋しいな。この二週間、忙しくて家に帰るのが深夜だったし、半分くらいは会社に

泊まり込んでいたからずつと湯船に入れていない。

お母さんには、昼間から贅沢だと文句を言われそうだが、帰ったらまずお風呂に入ろう。頑張ったし、そのくらいのお贅沢は許されるはずだ。

そう決めて、私は着替えてから大和と一緒に会社を出る。

「そういや、お見合いから二週間経つたよな？ あれから、御曹司様はなにも言っていないのか？」

電車で揺られながら今にも落ちそうな顔と戦っている私に、突然大和がそんなことを聞いてきた。「さあ……。このところ忙しかったから、親と茜ともまともに顔を合わせていないし。どうなってるんだらうねえ」

「興味が薄いな。まあ、なんか進展があったら教えろよ」

こいつ、面白がつてるな。

ニヤついている顔をギロリと睨みつけるが、大和は飄々としている。長い付き合いだけど、この男はこういうヤツだ。

「そろそろなんかありそうな気がするんだよな。絶対、厄介なことになるって」

「怖いこと言うのやめてよ」

「ま、結局のところ、今まで茜を甘やかしてきたツケが回ってきたんだな。なにがあっても白業自得だ。じゃ、お疲れー」

ニヤニヤしながら不吉な予言を残す大和と、駅で別れた。

私も徹夜明けの重い身体を引きずりつつ、家に向かって歩き出す。すると、鞆かばんの中で携帯が鳴り出した。

電話の相手は結婚して九州で暮らしている兄の樹だ。

「もしもし？」

『もしもし、碧？ そっちは変わらないか？ 見合いからちょうど二週間経つし、そろそろまた母さんが暴走してる頃じゃないかと思ってさ』

「はは、今のところは大丈夫だよ。ごめんね、心配かけて」

『心配するのは当然だよ。碧も茜も、俺のかわいい妹なんだから。特に碧は昔から、貧乏くじを引いてばかりだからな。悪気がないのは分かっているけど、茜にも困ったもんだよ』

ああ、なんて優しい兄なのだろう。

お見合いの後、替え玉の件を報告しておいたから、きつと心配して連絡をくれたのだろう。本当に、優しい兄だ。

『もし、なにかあったら相談しろよ。俺が直接、母さんに話してもいいから』

「うん、ありがとう。その時は、よろしくお願いします。じゃあ、また連絡するね」

『ああ、またな』

電話を切って、はあつとため息をつく。

なんだか嫌な予感がするな……